
風上颯の霊体験記

太子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風上颯の霊体験記

【Nコード】

N7756X

【作者名】

太子

【あらすじ】

記憶の無い少年がある少女とであい…

第一幕 少女とのであい

時は昼ごろ。

「ザザーザザー」

海の波音で目を覚ました一人の少年。

少年は驚いた自分が眠っていた場所は海の浅瀬。

「ここは？」

少年はつぶやいた。

普通に考えてもありえない、なぜこんな場所に、少年は必死に思い出そうとしたがなにも思い出せない。

少年は記憶が無いことになりに焦り始めた。

焦り、焦り、辺りを見渡す少年、周りには広めの浜辺、そしてその奥にはジャングルじみた森があり森の中からは獣鳴き声が聞こえる。

寒気がした。だんだん怖くなりとりあえず浜辺まで行こうとした少年。

その時、後ろからものすごい勢いで少年に風が吹き寄せた。少年は思わず後ろを振り向くとそこには一人の幼い少女が立っていた。

「だ…誰だ？」

思わず口が開いた。

だけど少女は何も答えない。

着物姿の少女、この少女にとつたら浅瀬でもかなり深い所に立っているはず、でもなぜか着物は全く濡れていない、不思議な感じだった…。

「そんな所にいたら危ないぞ！」

少年が言った。

だけど幼い少女はまた何も答えない。

「無視？」

少年は言う。

すると少女はやつと口を開いた、だけど波のせいなのか全然声が聞こえない…。

と、その瞬間またもののすごい勢いで風が吹いた。少年はバランスを失い転けてしまった。

「痛った…！」

少年は声をあげる。

と、ふと気づくとさっきまで目の前にいた少女が消えていた。少年は体中から一気に汗が出た。

「まさか流された……………！」

「おーい…おーい…！」

少年は一人必死で少女を探し続けた、だけど少女はまったく見つ

からない。

すると風に乗ってある言葉が聞こえた。

「こつちよ!」

可愛らしい声だった。

そしてその声が聞こえてきた方を振り向くと、そこにはさっき少年の目の前に立っていた少女がいた…。

かなり少年より遠い所に少女は立っていた。

少女が立っているそこはもう森の中、木と木の間からこつちを見ている。

そして少年は少女の足を見て少なからず確信した…この子は死んでいるのだと

その少女の透けた足を見て……………

第二幕 九死

「おーい お前名前なんていうんだ？」

少年は聞いた。

すると少女はまた何かをしゃべっている。だけど少年にはなかなか聞こえない、だけど時間が経つと少女の声がまた風に乗って聞こえてきた。

「唯^{ゆい}…この島に住んでるの！」

少年は初めて唯と会話できたことにとても嬉しく思った。

「俺は風上^{かざがみはやて}颯^{はつ}颯^{はつ}っていうんだ！」

颯は言う。

するとまた風に流されある言葉が耳に入った。

「この島には入らないで…！」

（いや意味がわからん！）

颯はそう思ったが口にはせずに浅瀬でポカーンとつつ立っていた。颯はどうしたらいいか分からずに辺りを見渡した、するとよく見たら海の中には人骨がてんと散らばっていた。

颯は、焦り唯のいた方を向くと彼女はもうそこにはいなかった。

颯はさすがに、これからずっと海の中にいるのは嫌になり島に脚を踏み入れた。

すると、四方八方から急に颯に向かって突風が吹いてきた。

「なっ何だっ!!」

浜辺の砂が目に入る。

「うわっ!!」

もう颯は訳が分からなくなった。あまりの突風に足がよろつき、もう立つことも出来そうに無く転けそうになったその瞬間風が吹きやんだ。

目をあけると颯の周りには颯を囲むように数十人の大人が立っていた。

大人たちは、ボロけた田舎くさい格好をして、よく見ると、そこから中怪我をしていた。

（何なんだ こいつら？）

颯は、状況を呑み込めずにいた。

そして、目の前に立っている大人達の足もさっきの少女 唯と同じで透けていた。

「出てけっ!!」

颯を囲っていた数十人の中の一人が声を上げて言った。すると他の大人達も次々に同じようなことを言い始めた。

「出てけ!!」

「この島から出ていけ!!」

「お前らにこの島を取られてたまるか!」

颯は少しパニックになっていたが言われっぱなしにも腹が立ち。

「うるせーっ!俺だつてこの島に来たくて来たわけじゃねーよ!!」

「………てか記憶ねーし!!
お前ら何か知ってんじゃねえのか?…」

と颯は怒鳴ってしまった。

だけど数十人の大人達は誰一人しゃべらない。

「……………」

「お…おい何とか言えよ!」

「……………」

しゃべらない。

「本当は知ってるよ!お前らの事……!」

「……………」

颯はむきになって嘘をつく、が大人達はしゃべらない。
さらに颯はいう。

「お前ら死んでるんだろ！あつ足透けてるんだよっ！！……………うつ
嘘をつくなっ俺の記憶がないこととお前ら絶対関係してるんだろ…
…！」

とその時、数十人の大人の中の後ろの方にいた一人の大人が動き
出した、結構の速さで走って来る。

「ダダダダダダダダ」

颯は何かされると思い両手を前に構えた、そして次の瞬間颯の予
想は当たるかのように走って来た大人は颯に殴りにかかってきた。
だけど颯もカウンターを喰らわそうと殴りにかかる、が 颯の拳
は殴ろうとした相手の顔をすり抜けた。

「えっ？」

颯は不思議に思ったが一瞬で色んな事が頭を過ぎった。

（そうだ！！こいつは死んでいるんだいくら俺が殴ろうとしても触
れる訳が無いんだ！）

と そんな事を思っている間に相手の拳は颯の顔に。

「ガッ」

（な・・・何でお前の拳は俺に当たるんだよ？）

颯は一瞬、頭がくらみ目の前が真っ暗に…

しかし颯は、必死に気を保たて、その場から逃げ出した。

（ハアハア…なんだよあいつ等？ …あんな所にいたら間違いなくやられる！）

颯はそんな事を考えながら逃げているとそこはもう森の中深く。

（ハア…ハア…ここはどこだ？かなり森の奥に入ってきたな！！！
………こんなことならあの女の子…唯のいうこと聞いとくんだった
！！

でもあのまま海の中にいるわけにもいかなかったしな…！）

すると突然。

「おーい！」

声が聞こえてきた。

颯は声の聞こえた方を振り向くと、そこには颯と同じぐらいの背丈の少女がいた。

その少女は颯に向かって

「ごめんなさい！少し手を貸してください！」

と言い、手を振って来た。

そして颯は、この島でやっとまともに会話できそうな子に会えたと思い、急いで少女のもとに駆けて行った。

でも不思議なことに少女の近くには自転車が置いてあった。

（こんな森の奥深くに自転車！？）

颯は聞いてみた。

「この自転車はキミの！？」

すると少女は、笑顔で頷いた。

「こんな足場の悪いところで乗ってたのか？」

少女は首を横に振りこう言った。

「ううん、この上に道があるんだけど、そこから転げ落ちたの！」

よく見ると少女は足からものすごく血を流してた。颯は驚いたが、その衝撃を上回るほどの衝撃的なことが颯の目に映った。

それは、この少女もまた足が透けていたから…。

（この子も死んでいるのか）

颯は少しガツカリした顔で少女を見た。

「申し訳ないんですけど、自転車を…あの～
上まで押し運んでももらえますか？」

少女が突然、颯に頼んできた。

これを聞いて颯は、この少女は自分が死んだことに気が付いているのか疑問に思った

が、そのまま自転車を上の道まで押し運んだ。

上まで行くと、そこには普通の道あり電柱も数本建っていた。

「はい！あゝ重たかった！」

颯は、そんな事を口にする少女は。

「あのー… 言いにくいんですけど、家まで送ってもらっていいですか？」

と言いだした。

今、自分の事で精一杯な颯には、唐突すぎて困惑し、颯は難しい顔をしたが、すぐに。

「まあ…その足じゃ自転車こぐことも出来ねえしな！！」

と言い颯は少女を自転車の後ろに乗せ、少女が指を指し、指示する方へ向かって自転車をこいだ。

だけど少女の指示する方向は入り組んだ道ばかり、それでも颯は自転車をこぎ続けた。

しかし、やはり可笑しな道ばかり進んでいく。
すると後ろから何かが聞こえた。

颯が。

「いま、何か言った？」

と聞くと。

「もっと早くこいで！」

少女が嫌に低い、冷たい声で言った。
少女は続いて。

「もっと、もっと、もっと、もっと、もっと、もっと、もっと、もっと、もっと、もっと……」

と少女はどんどん声を上げて言う。

颯は段々怖くなり、こぐスピードを速める。

「ガツガツガツガツガツガツガツ」

L

急に砂利道入った、さらに、そこは下り坂。

坂で勢いづき、自転車はかなりのスピードで下る下る下る。

と急に、自転車のこぐ重さが軽くなり、颯は後ろを振り向くと後ろに乗せたはずの少女がいなかった。

「えっちよっ…！」

颯は戸惑った、と颯は前を向くと目の前は、崖っぷちだった…。
急いでブレーキをかけるが、かからない、かからない、颯はその
まま崖を飛び出し…

宙へ。

だが颯は見た、崖っぷちに立っている、さっきまで自転車の後ろに乗せていた少女を。

そして、颯は確信した。

こいつは俺を殺すために今まで、演技をしていたのだと。

颯は、意識を失い、そのまま下へ下へ落ちていった………

第三幕 味方

真っ暗な暗闇の中、意識を取り戻した颯。

（ここは？）

（真っ暗だ！……いや俺が目を開じてるからか？）

颯は、ゆっくり目を開けると、今度、そこには辺り一面真っ白は景色があつた。

また、急に自分が訳のわからないところにいる事に、颯は動転し始めた。

しかし、颯はある事に気づいた。それは、今はまだ、意識を失う前の記憶があると。

「そうだ！俺は崖から落ちたんだ！」

でも、やはりここが何処だか判らない。

「フワッ」

と、冷たい風が颯の背後を流れた。

颯は反射的に後ろを振り向く。

すると颯の後ろには、島で出会った少女唯が立っていた。

「あつ…ゆ 唯だよな！俺のこと覚えてるか！」

颯は言う。

すると唯は。

「今日、出会った人を忘れるほど馬鹿じゃないよ！！」

言った。

颯は、これを聞いて思った。

（今日？じゃあ…俺が記憶を失ってから、そんなに時間が経ってないのか！）

「なあ 唯、ここは何処かわかるか？いや、てか 知ってるだろ…多分？！」

すると。

「ごめん！あなたの夢の中に勝手にはいつてきて…！」

唯は申し訳ない顔で言う。

（ゆ…夢？？あつ…ああ これは夢か！）

颯は、この時、唯に聞きたい事が山ほどあったが、あまりに色々ありすぎて疲れていたのか黙っていた。

「あなたを助けたくて、……………
あなたを助けたくて夢に現れたの！！！」

唯は、途中かなり間をあけて言った。
そこに、颯はある事を直感で感じた、
唯は何か隠していると。

颯は、時間が経ち落ち着くと一気に唯に聞きたい事を聞いた。

「助けるって、……あの、俺に襲ってきた、俺を殺そうとした人間達からか？」

「うん！」

「お前が、俺をあいつらから助けてくれるのか？」

「うん……！」

「お前らは……その！」

「！？」

「死んでいるのか！」

「……………うん！」

唯は静かに笑った。

「俺が、海の浅瀬で目覚めた時……………いや
俺は、俺は海の浅瀬で目覚める前の記憶がないんだ！……………なあ唯、

何故俺が、あんな場所にいたのか知ってるんだろ!？」

だけど、唯は首を横に振り。

「うっん、残念だけど、それについては私も知らない!……あなた
が、突然 沖から流れてきたの、この島に!」

颯は、予想外の答えに言葉を失った。

その時、わずか数秒だったが、ある記憶が蘇った。それは、一人
海の中で溺れていく自分の姿。

更に、その時、颯は 泣いていた。

颯は、体がふらついた。

(な、何だ今のは…何か思い出そうとした!!
俺の記憶……!)

それを見て唯は。

「どうしたの?」

と聞く。

「い、いや今記憶が…!」

「え?」

颯は、その場で意識が遠のき、そして、目を覚ました。

あたりは暗く、時は夜になっていた。

目が暗さに慣れれば、月明かりで案外周りのものは見える。

颯の目の先には、かなりの高さの崖があり、颯は崖を見上げあんな高さから落ちてきたのかと思いつつも、実際どこからが夢で、どこからが現実なのか分からなくなっていた。

キョロキョロと、颯は辺りを見渡すが、唯の姿は見当たらない。

（助けるって言ってたのに、やっぱりアレは夢か！）

とその時。

「ガザザザザザアー」

そんな音が聞こえた。

風か、獣か分からないが颯は音のした方へと向かう。

颯は少し期待していた。もしかしたら、唯かもしれないと。すると、そこに居たのは唯でもなく、浜辺で颯を困ってきた大人たちでもなく、自転車の後ろに乗せた少女でもなかった。

（こいつは、外人！？）

そう、颯が見たのは、海賊風の格好をした外国人だった。

「ブツブツ…ブツブツブツ……ブツブツ…！」

その外国人は、聞こえるか聞こえないかぐらいの声の大きさで何かを言っている。

颯は耳を傾けると外国人は。

「…ブツブツ…この島はいただく…ブツブツ…！」

そして更に。

「殺す…殺す…殺す殺す殺す殺す…
ブツブツブツブツブツブツブツ…誰も…
生かさない…！！！」

これを聞いて、颯は恐くなり全速力でその場を逃げ出した。

「ガザガサガサガサガザザザアー」

だが、運の悪いことに颯はあまりにも荒く逃げ出したので、その外国人に気付かれてしまった。

そして外国人は颯を追いかけてくる。

「ザザザザザザザザ」

颯は、死に物狂いで逃げだが、相手の追いかけて来るスピードはあまりにも速く、このままでは追いつかれると諦めかけた。

その瞬間。

「ザバザバザバザバアー」

向かい風が押し寄せてきた。

（こ、こんな時に…！）

颯は泣き崩れる寸前だった。
しかし。

「うつ　　うわぁ！」

颯の後ろで、わめき声が。
ふと見ると、颯を追いかけてきた外国人が地面でのた打ち回っていた。

そして、そこにはもう一人男性が立っていた。

颯は、その男をみて、あることに気付く。

（こいつは、き、今日　島の浜辺で…　　　俺を殴った。）

そう、颯が見た男とは、颯も知っている、
今日、島の浜辺で颯に殴りにかかってきた男だった。

（俺は助けられたのか？）

だが、颯は助かったという気持ちよりも恐怖感が勝り、その場を離れた。

「限界だ　　限界だろう　限界なんだ　　よ！！」

颯は、そんな独り言をいいながら島を歩き回っていた。

今日は一日何も口にしていない颯、足はよぼつき、フラフラにな

りながらただただ歩いていた。

（俺は…どこに向かっているんだ!?!）

「ゴッッ」

颯の頭上に何かが落ちてきた。颯は、その場でうずくまる。

（いつてゝ、な…何だ一体!?!）

颯は顔を上げると、そこにはリンゴがあった。

リンゴが颯の目の高さぐらいの所で、宙に浮いている。

「う…うわあああああ!?!」

颯が叫んだ。すると。

目の前には、唯が立っていた。どうやら、リンゴを持っていたのは唯だった。

「ゆ 唯!?!」

唯は、颯にリンゴを渡す。颯は空腹で、思わずリンゴにがつついた。

「よほどお腹が空いていたのね!」

「当たり前だろ…今日一日何も口にしてねえんだから!?!」

颯は続けて言う。

「なあ 唯…一体この島で何があったんだ？… 俺は、…俺の身には今日一日でいろんなことが起きた だから、分かる！この島は、尋常ではないのだって！ 教えてくれ唯！！」

すると唯は。

「数年前、私たちは…」

と、言い出した。

（私たち…！？）

ふと気付くと唯の後ろに、誰かが立っていた。ある少女。

「お お前は！！！！！！」

颯はいう。

そこにいたのは、今日、颯が自転車に乗せた少女だった。

「なっ、唯！？なんでこいつが、お前と一緒にいる？！？ こいつは、今日俺を殺そうとしてきたんだぞ！！？」

颯は、焦り言う。

「私の姉なの！」

「えっ！」

どうやら、唯の後ろに立っていた少女は唯の姉のようだ。

すると、その姉はこう言った。

「残念！生きてたのね…あなた！！」

唯は、姉の突然の発言にかなり慌てたそぶりをして。

「ち、ちょっと…お姉ちゃん、何いってんのよ！？」

という。

すると、その姉は物凄く形相を変えて、唯を睨みつける。唯は、それを見て肩を縮こませる。

そして、その姉は急にニヤリと笑い言い出した。

「颯くん！？だつてね！！…唯から聞いた…！

記憶が無いみたいだけど…、悪いことは言わない、この島から出て行って！！」

これを聞いて、唯は颯を庇うかのように言い出す。

「お姉ちゃん！！だから、颯は私たちに島から追い出される理由が分からないんだって！

まず、そこから説明しないと！！」

「知るかア！！」

またも姉が、物凄い形相をして言い放つ。

「唯！！あんたは、優しすぎる！

思い出せ、あの時の恐怖を、地獄を、この颯だつて人間！！…あの海賊たちと何もかわらないかも知れない！！」

「うん…わかつてる！でも…」

唯は少しテンパリながら言った。

「でもも、くそもねえ！！今すぐ追い出すんだ！たえ、この颯
っていう奴が、あの海賊たちと違って、今の私たちには、こいつ
の面倒なんかみれねえ！！」

「ちょっと落ち着いてよ、お姉ちゃん…！！」

その時、唯の姉が嫌に唯を見つめて言った。

「あとひとつ、唯、前からあんたに言いたかったことがある…！」

唯の姉は、そういうとすました顔をし、続いて静かに、こう言った。
た。

「お姉ちゃん、お姉ちゃんって耳障りなのよ！私は、唯…あんた
の姉じゃない！気楽にお姉ちゃんなんて言わないで！！」

………そうだ、唯！あんたも、この颯と一緒に島から出
て行ったら？」

颯はこれを聞いて、唯が何を言われているかおおよそ検討がつい
た。颯は同情するかのように悲しそうな顔で唯を見つめた。

唯は、いきなり颯の手をつかみ走り出す。

行き先が無くただただ、その場から逃げ出すかのように走り出し
た。

その時、颯は見ていた、淋しそうな顔でこっちを見ている唯の姉

を…。

ひたすら走る唯。颯はただ黙って唯について行く。

唯は泣いていた。

そして颯は、正直 限界を超えていた。

今日、一日で起きた出来事、更に自分を助けると言ってくれた唯の今の状況を考えると。

と、颯は何か吹っ切れたかのように唯に言った。

「よし、唯！！俺の背中に乗れ！！」

「えっ？」

「泣きながら、走ったら危ないだろ！！」

「う、うん！」

唯は颯の背中にのる。のり方は、ぎこちなく。颯は。

「オイ…ちゃんとのれよ！」

すると唯は。

「……おんぶなんて、してもらったこと無いもん！」

と言う。

「嘘付け！」

「嘘じゃない！」

「親にして貰ったこと無いのか。」

「うん…親………いない！」

颯は、驚いた。

「あっ……ごめん！」

「ううん、いいの！……颯、ありがとね！！」

颯は、唯を背中に背負いながらゆっくり歩く。
そんな優しい颯を見て、唯は言う。

「颯、颯になら頼めそう…頼んでいいかな！？」

颯は、まだ唯が何を自分に頼もうとしているのか分からないが。

「ああ、任せろ！」

と、言う。

そして唯は。

「じゃあ……、落ち着いたら言うね…！」

と、穏やかな声で言った。

しかし、唯の頼見事を軽く受けたが颯だったが、颯自身まだ知らなかった。

この島で数年前なにが起きたのか。

第四幕 島の悲劇

唯は、数年前この島で起きた事を説明し始めた。

「この島には、昔から人が住んでいたの！

事件が起きたのは数年前、…この島にある海賊船が漂流して来た！
海賊船には、かなり大勢の海賊たちが乗っていて、海賊たちは、長い航海で体に傷を負い、食料を失い、空腹で死ぬ寸前、船の甲板では既に何人が意識を失い倒れてた……！

…始めに、その海賊を見つけたのが私だったの！

私は、当時まだ海賊の恐さを知らなかった！

そして、それをほっとけなかった私は、その海賊たちを島に招き入れた！……

島の皆は海賊の恐さを知っていたから始めは海賊たちを助けることを反対！

……
……私が無理言って、海賊を助けることを頼みこんだ！……

……
そして、私と一緒に頼みこんでくれたひとがもう一人……

………！」

「唯？」

黙り込んだ唯は言う。

「…もう一人いたの、私と一緒に頼みこんでくれたひと！………

それが私のお姉ちゃん！」

「さっきの!？」

「…うん　！　本当のお姉ちゃんじゃ無いんだけど…！」

その時、颯はなんとなく予想はしてたけどという顔で空を見上げる。

「昔からお姉ちゃんは優しかった！私が困っていたらいつも助けてくれて！」

その時もお姉ちゃんのお陰で、海賊たちを助けることが出来た！

でも、　やっぱり島の皆の言ったことは正しくて、腹を満たし、傷が癒えた海賊たちは私達に襲いかかって来た！

海賊たちは、この島をいただくと怒鳴り、

そして、私達はなすすべなく絶滅した！」

「……………!!！」

颯はただ黙って唯の話を聞く。

「それから……………、私は皆に合わせる顔がなく、成仏せずにこの島にいとどまった。……………」

すると、島の皆もお姉ちゃんも、私とおなじで成仏せずにこの島をさ迷っていた！

……………さ迷っていたっていうのは、ちょっと変かな……………皆は、海賊たちを探しさ迷っていた！」

「殺そうとでもしてたのか、海賊たちを…島の皆は！」

颯は、冗談半分でいう。すると唯は。

「……うん、颯のいう通り！
皆は、海賊たちを見かけると次々に襲いかかった…、島を奪い返そうと必死で！
だけど、海賊たちも同様に死んでもなお、島を奪おうと必死で戦う！
簡単な話、そして今に至る！」

颯は呆れたようにいう。

「なるほどな、それで俺は死人に島を出ていけと言われたり、この島で海賊を見かけたりするのか…！」

「うん ごめん！……」

島の皆は今、人を信じれなくなってるの……！！！」

「お前が謝ることねえよ！！！」

颯はささやかにいう。

そして、颯は疑問に思ったことを聞く。

「でもよ、死人どうし争っても意味ねえんじゃないの！！お互い、既に死んでるわけだし！」

「それが……消えるの…！」

唯はいう。

「一度死んだら幽霊になつてこの世にいるけど、二度目は無い！
幽霊になった状態で、例えば刃物で心臓なんか刺されたら、もうこの世から消える…！！
私は、そういう海賊を何人か見た…！」

「そっか！」

なるほどな、という感じで颯は言った。

「で…俺は何をしたらいいんだ!!」

唯は少し間を開けていう。

「……………私もよくわかんない…どうしたらいいのか!!
でも、皆が和解出来たら良いなと思う!」

颯は、難しい顔をして。

「うーん、それは、無理かもしれないね!!」

と言うと、唯は、悲しそうな声で。

「うん……………!!」

と。

その時。

「だけど、やるだけやってみるよ!」

あらためて、颯は言った。

そして、唯はうれしくて… 泣いた。

「チーチチチ」

時は、日が昇り始め 朝が訪れていた。

その時、今更ながら颯は気付く。

「ああーっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

唯は突然の颯の叫び声に驚く。

「どっとうしたの?」

唯が聞くと。

「お、俺今思うと、幽霊であるお前に……
触ってる!!」

そんなことか、という顔で唯はクスクス笑った。

「なにがおかしい?」

颯が問うと、唯はふざけて。

「颯も死んでるんじゃない?」

と、言った。颯は、ムスツとした表情で唯をにらんだ。

すると唯は、颯に少し強くしがみつки言った。

「たぶん、そんなもんだよ！」

死んだら、もう一生会えないと思うから見えない！会いたいと思うから見える！

触れたいと思うから、さわれる！…ね！」

颯は納得した。

それから、颯は思いがけないことを言った。

「じゃあ、まずは唯 お前の姉から味方につけよう！」

……………。

「えっ、どういうこと!？」

「いや、だから 一番味方に出来そうなお前の姉をだな…！」

「いやいやいや、颯みてなかったの？」

私、お姉ちゃんから嫌われてるのよ！

……死んでから久々に、お姉ちゃんに出会ったけど…あんなに嫌われてると思わなかった……………！」

唯は、無理に笑顔を作りながら笑う。

「心配すんな！お前の姉ちゃんはお前を嫌ってなんかいない！」

「何を根拠に!？」

唯は、問うと。

「見てればわかる！」

と、颯は自信満々に答えた。

そして二人は、唯の姉を探し始めた。

探し始めてかなりたつ。

と、颯は、急に歩きとどまり。

「お前の姉ちゃん、名前なんていうんだ？」

「えっ、……？……かや！かやって、いうけど……何でそんなこと！？」

すると、颯は大きく息を吸い。

「かあ———やああ———！！！！！！！！！！！！」

空に向かって叫んだ。

「ちよつ、颯！？どうしたの急に！」

「そんな、大きい声出したら島の皆や海賊たちに見つかっちゃうよ！」

「いいんだよ！見つかった！！
上見てみるよ、唯」

唯は、颯のいったとおり上を見てみると、そこには唯の姉 かやが宙に浮いていた。

かやは、二人の方を向くと。

「唯、何で戻ってきたの!？」

と聞いてきた。

当たりは静まり返った。

「やっぱり!! かや、あんたはわざと唯にきつく言い、唯をこの島から追い出そうとしたんだろ!!」

颯は知った風なくちで言った。

「いきなり何を？」

かやは、少し焦り気味でいう。

唯は、ぼつ然とその場で颯を見ていた。

「諦めな、いくら隠してても見てたらわかるよ!」

かやは、ため息をつき、いいだした。

「そうよ!…私の唯一の姉妹、…唯は私の宝者!!
だから、唯にはつらい思いをしてほしくないの! 苦労もしてほしくない!!」

……ずっと、今のままの優しい唯でいてほしい!!」

かやは、泣き出した。

「だって、…こんな争いの 絶えない島なんかいたら…いくら優しい唯でもダメになるかも…しれないじゃん！」

「だからって、あんな下手な芝居なんかしなくても…なあ！！」

颯は笑いながら唯に言うと、

唯もその場で、ポロポロと涙をながしていた。

「大丈夫よお姉ちゃん、…私、ずっとお姉ちゃんの知ってる優しい唯でいるから！」

唯がそういうと、颯は安心したような顔でささやかに笑い、かやは、更に泣き出した。

第五幕 悲しみと怒り

あれから時間がたち、三人は森の中、
大きな大木の下にいた。

颯は、疲れ果てその大木に背を掛け寝ている。

かやは、突然あることを言い出す。

「ねえ唯？…颯君さ唯にさわれるって事は…！」

「うん！わかってる……だから嬉しかった！」

「良かったね！」

「うん…！」

「うん………！」

颯が、寝言を言う。

「死んだ方が、楽なんだろうか…！」

「……限界なんか、とつくに…！」

これを聞いて、かやは言った。

「颯君さ、いつたいここに来る前に何があったんだろうね………！」

「うん！」

唯は、うなずいた。

「唯、颯君の朝ごはんでも採りにいこ！」

「うん……！」

かやは、唯が元気の無いことに疑問を持つ。

「どうしたの、唯？なんか元気ないような！？」

「ううん、別に！……お姉ちゃんが私の見方に着いてくれて良かった
！」

「うん！」

「でも、なんか颯もお姉ちゃんも……唯のわがままに付き合わせて……
……本当にこれで
良かったのかなって……！」

「なーに言ってるの……！」

「私たち唯一無二の姉妹じゃん……！」

かやは、言う。

すると唯は、安心したかのように笑って言った。

「ありがとう……！」

かやと唯が颯の朝食を探りに行つて数時間、颯は一人、大木の下で寝ていた。

この時、颯は夢の中で忘れていた記憶を思い出していた。

（ここは？）

辺りはまたも、一面真っ白な景色。

（また夢の中か！……………そうだ！

俺は何か大事なことを……………思い出そうとした気が…！）

ある一つの記憶が、颯の頭の中を流れる。

（この記憶は…！）

颯が、自分の父と喧嘩している姿だった。

（な、なんか嫌な記憶が……………！）

颯は、目を覚ます。

時は既にお昼ごろ、唯とかやの姿はなく、颯は寝ぼけながらも二人を探し始めた。

これは、無意識の行動だった。

颯は、ある広い池の周りを歩いていた。
何周も何周も。

「ん、……あれここは!？」

颯は、ふとつばやく。

「ああ!無意識に歩いてた………!
で、唯とかやは何処に行ったんだ………!」

その時。

「ガザザザザザザー」

「………!!!」

「………!!!」

「………!!!」

「…………!!!!」

もの凄い音と共に、いくつもの人のわめき声が聞こえた。

「な、何だ今の音は!？」

人の声、人がいるのか……!??」

そして、颯は音のする方へ恐る恐る向かう。

音のする方向には、とてつもない事が起きていた。

颯が目にしたのは、あたり一面火の渦に飲み込まれた、一つの村だった。

「これは、一体……!!」

火の子が、颯に降りかかる。

「うわっ……!!……!!」

……!？」

だけど、こんな中、火の渦の中から人の声が聞こえる。それは、颯が聞いたことのある声だった。

「……て!!」

聞こえる。聞いたことのある、幼い少女の声。

「……て!!」

颯は、見た。

そして、そこにいたのは 唯。

唯は泣きながら、火の渦の中で助けを求めている。

「颯……颯、助けて……!!」

……。

「な、……唯何でそんな所にいる？
早く、こっちに来い！ お前いくら幽霊でも、そんな所にいたら……」

……死んで、…消えちまうだろ」

颯は、とっさに言った。

「は、…早く飛んで来いよ！

幽霊だから飛べるだろ！！………なあ？」

だが、颯はこの時衝撃的な者を目にする。

それは、唯の目の前に倒れている、かやの姿だった。

思わず、颯は火の中に飛び込む。

「だ、大丈夫か…？」

颯が、火をよけながら二人の元へ駆けつけると、かやは全身傷だらけで、そこら中から血を流していた。

「い、一体…何があつたんだ！？」

颯は唯に聞くが、唯はパニックになっているのか、しゃべらない。すると、倒れているかやが言い出した。

「私が、悪いの！」

「え！？」

「私が、……唯の頼みを、この島をなんとかしたいって、海賊たちと和解は出来ないかって……、そう島の皆に頼んだら……この……ザマ………！！！」

かやは、泣き出した。

「そんな……ことだけで……………！」

颯は、言葉を失う。

「もう島の人たちは助からない！」

かやが言い出す。

「島の皆は、欲に負けて理性を失い始めてる！！……………早く助けないと……………！！！」

かやが、ふと笑った。

「ごめんなさい颯君……………、唯のことお願いするわ……………！！！」

颯は気付く、かやの体が消え始めていることに。

「お前、体が……………！！！」

「お姉ちゃん……………！！！」

かやが静かに言う。

「唯、逃げたかったら、いつでも逃げていいのよ！……………」

「ううん……………、大丈夫！」

「わかった！……………じゃあ、私は一足先に……………天国で待っているわ！」

すべてが終わったら、また、会おうね！」

「うん……！」

……。

かやは、颯の方を向いて笑い…消えていった。

「ゴゴゴゴゴゴゴゴ」

あたりは、火と火で荒れ出した。
颯は、言う。

「唯、お前はここから逃げろ！」

「えっ、は 颯は？」

「俺は …… やることがある！
唯、お前は、死んでも生きろよ！」

と、颯が次の瞬間大声で叫びだした。

「こそこそ隠れてんじゃねえ！！
…ハア…ハア…… 次の相手は、俺ダー！！！」

すると、火の渦のその奥の木々から
ズラズラと、正気を無くした島人がでてきた。

唯は、その光景を宙から見ていた。

第六幕 違ったピースのまとめ

あれから、どれほどの時がたっただろうか。

燃え上がっていた炎が弱まり、しばしばとしている中、島人の勢いは増している。

唯からは、もう颯の姿が見えていなかったが、感じていた。あの、島人の集団の中心にいるのだと。

（助けなきゃ……！）

唯が、そう思い立ち争いの中に飛び込もうとした、その時。

「お前等はあー！」

颯だった。突然叫びだした。

「お前等は、クズだ！

一緒に暮らしてきた……家族みたいなもんだったんじゃないのかよ！それでも……

それでも人間かよ！」

颯は泣いていた。その場で、島人たちに殴られながら言ったその言葉は、島人たちには届かなかったが、唯一、唯の心を震撼させた。

唯は、何かを決心したように動き出した。

手を上に上げ、そして一気に下へ振りかざした。

その瞬間、突風が巻き起こり、颯の周りいた島人たちが吹き飛んでいく。

そして、颯は唯の方を向きいった。

「ナイスだ唯!!」

「へへっ……!」

唯は照れて笑った。

唯が吹き飛ばした島人たちが、次々に消えていく。これを見て。

「唯!!これは、間違いじゃねえぞ、正しい判断だ!」
「罪悪感なんかには溺れるなよ……プラスに考えたらいい!前進に進むための犠牲さ……」

それに、別に殺した訳じゃねえし、あの世できっと、かやがこの島人たちに説明するさ!」
「だから、……一氣にこの島人たちを消しにかかるぞ!」

颯が言う。

すると、唯が笑いながらいった。

「大丈夫、颯!!」

島人を、この世から消しても罪悪感なんかには溺れたりしない!」
「お姉ちゃんと約束したの、もしも、島の皆が私たちの敵になったら、私たちの力で島の皆を救うって!!」

皆、この世で消えても絶対……天国に行くからって……!」

「……………そっか!」

爽やかな風がふいた。

さらに時間が経ち、目の前にいた島人はもう数えられるほどになつていた。

「颯あと少しだよ!」

「ああ、…あと少しだ!」

颯が島人に向かって走り出す。

「ガッ」

「ガッ」

順番に消えていく島人。

「……………あと…6人…
ラァァー…」

「ガッ」

「あと…………5人…………」

（ふつ、さつき睡眠とつたから大丈夫だと思ったけど、もうふらふらだ!）

しかし、ここで予想外の出来事が起きる。

「颯えー!!」

近くで、バテていた唯が叫んだ。

と、そろそろと颯と島人の争いの中を割り込むように、海賊風情が数人入ってきた。

そして、颯は驚く。海賊の中には、生きている者と死んでいる者がいたから。

「颯、逃げよ…!」

唯が言い出す。

「だな、…!」

島人オー……唯を恨むなよ!」

颯がそう言っ、その場から逃げ出した。

逃げている途中に、二人に聞こえたものはあまりにも残酷だった。

残り数人の島人が消えていく声は、颯にはとても心を痛めるものだった。

（俺も、さっきまで……!）

「颯!!」

唯が言う。

「罪悪感に溺れちゃダメだよ!」

すると、颯が言った。

「ありがとう…！」

「ダダダダダダダダ」

「ザザザザザザザザ」

木々をかき分ける音がした。

その方向を振り向くと、生きた海賊が三人が二人を追いかけてきた。

「い、生きた人間がいるぞ！」

くそ、まだ島人が生きていたのか…！」

「あの時、全員殺したと思ったのに…！」

「お前等が生きていると、俺らまであぶねーだろうがっ…！」

これを聞いて、颯の怒りは爆発寸前まできていた。

（何言ってるんだ、こいつら…！）

だけど。

「颯、今は耐えるのよ…！」

「唯!!」

「……………」

「ああ、わかった!」

唯が、バテながらも力を振り絞り旋風を起こした。
海賊は旋風でひるみ、二人はその間に、その場を切り抜けた。

「ハア…ハア…まいたか!!」

「うん…!」

疲れてる唯に颯が言う。

「へへへ…幽霊でも疲れるんだな!」

「ハハ……うん」

そんな和やかな会話もつかの間、次の奇襲が二人を襲う。

「ガザサ…」

木々を分ける音とともに、ある男が現れた。

海賊だった。三十代ぐらいの、物凄く強力のありそうな生きた海賊。

たった一人で、二人の前に現れた海賊は、ボソツと言う。

「頼むから、死んでくれ!!」

二人は、かまえた。

(くそつ、こんなバテてる時に!!)

.....。

「ち、ちよつと、待って!

…死んでくれって、いきなり意味分かんないよ!」

唯が、必死にその場をもがく。

「じゃ…じゃあ説明してやるよ!」

海賊が、語り始める。

「俺らはよ、この島へくる前から海賊をやっていた、いや 当たり前のことだけだよ!

だから、世間じゃ俺らは悪党としてしか見られない…そんな存在! 指名手配されたり、誰彼構わず殺されかけたり、毎日が地獄の日々を送る立場にいた!

そして、拳げ句の果てにどこの国にも受け入れられなくなり、食料不足、瀕死の状態で海を漂流する始末だった!!」

海賊が少し表情を和らげ続けた。

「でも そんな中、運のいいことに、この島にたどり着いた! 船内にいたクルーは、その時全員思ったはずさ、助かったって。

そして、幸運なことにクルーは誰一人、まともに立ち上がれる奴はいなかったが、この島には優しい島人がいて、その島人たちによって俺らはたすかった！

……………！

とても丁寧に見病してくれたのを、覚えてる！」

「じゃあ何で、その島人たちをお前らは殺すんだよ！」

颯がいう。

「スパイがいたんだ！俺らの船には！」

「……！」

「スパイ！クルーのかずは数百人！
一人二人紛れたって誰も気づかない！」

航海中、スパイに俺らの命が狙われなかったのは、スパイも俺ら同様食料不足で力果てていたから！

でも、この島に来て力を取り戻したスパイどもは、最悪なことに俺ら海賊に襲いかかって来た！

しかし、スパイの数は俺が知っている限りで、たった二人、総勢数百人の俺ら海賊は、当たり前のごとくそいつらを返り討ちにしてやった！

……………結局は逃げられたんだが！！

事態が一気にひっくり返ったのはその後、

奴らスパイは卑劣なことに島人の格好で俺ら海賊に近付いて来やがった！

そして、俺らに襲ってきた！！

もちろん、すぐに襲いかかって来た島人がスパイの連中だって気付

いたか、スパイどもは

島人にも罠を仕掛けてやがった！

スパイどもは…島人にも、俺ら海賊の格好をして襲っていた！
そこからだ、俺ら海賊と島人が争い始めたのは！」

「それで！」

颯がため息をつきながら言った。

「じゃあ、全部の始まりはそのスパイの奴らからから始まったのか
！？」

「ああ、…！」

……！海賊が申し訳ない顔で言う。

「俺らは、必死で島人に説明したが、時はすでに遅かった！

何人も殺された島人の怒りは、静まることなく！

そして、俺らも決意した武器を持ち闘おうと……ここまできたのなら！」

「それじゃあ、別にこの島が欲しかった訳じゃねえんだな！！」

「ああ、もちろん！

俺らは、ただ 止められないのなら、闘うまでという答えを見つけ
たまでで…！」

……それにまだ、そのスパイどもを島人の格好をさせて、この島に
野放しにさせたままだし！」

真実が次々と明らかになっていく。

「ハッ！！でも、納得いかねーよな唯！！」

「うん！」

颯が、海賊に向かって言う。

「俺は、ケジメつけねー男は嫌いだ！」

「だ、だったらどうしろと…！」

「ふん、意味の分かんねーまま死んで成仏出来なかった奴だっているんだ！

可哀想すぎで、涙でるよ！」

「……！」

「男、風上颯に任せろ！」

そのスパイどもをとっ捕まえて、お前ら海賊と島人を和解させてやる！！」

「出来るのか！？」

「もちろん！」

自信満々で颯は言った。

だけど、ここで唯があることに気付く！

「島人って、全員消えたんじゃない！」

……。言葉を無くす三人。

「一人くらいいるだろ!!」

颯が言った。

この時、少しずつだが種類の違ったピースがまとまろうとしていた。

そして、今 四人目の味方がついた。

第七幕 消えた少女

あれから数時間。

「俺の、名前はバジル！！ よろしくな！」

海賊は、そういうと二人に握手を求めた。

「そんな事より、寝るぞー！」

「えっ、颯そんな事って… 名前は大事だよ！」

「ははは、いいよ いいよ別に」

そういう海賊の悲しそうな顔。

颯が寝ている中。

「唯ちゃん、寝てていいぞ！」

俺見張りしとくから！」

辺りは、少し暗くなっていた。

「うっん、大丈夫！」

死んでから眠たくならないの……！」

「えっ？」

バジルは、気付く。

「あつ、唯ちゃん死んでるんだ!」

「ははっ、気付いてなかったの! バジルって、鈍感だね!」

「お、おう!

でも、俺一応 船の中じゃ戦闘の指揮を頼まれるほどの者だったんだぞ!」

「えーっ!」

この時、颯は起きていた。あることを思いながら。

それは、唯と初めて出会った時のこと、

唯を見て初めの印象は暗い奴だと思っていた颯。でも、今はこうして明るく喋っている。

颯は、嬉しかった。

そして、颯はまだ気付いていなかった、
自分が唯を好きになっっていることに。

「知ってる!? 幽霊って、たぶん寝ると死ぬんだよ!」

「ん?」

「私、一回だけ死んでから、全てがどうでもよくなった時があったんだけど、

その時、急に物凄く眠たくなったの！

で、思ったの 消えるんだって！」

「へー、でもそれじゃあ寝ると死ぬんじゃないかって、死ぬときに眠たくなるんじゃないのか？」

「あつ、ホントだ！」

「唯ちゃん、鈍感だな！」

颯は、楽しそうな会話に入れずガツカリしていた。

（くそつ、起きるタイミングがねえ！！）

「そういや、唯ちゃんと颯くんって…兄妹じゃないよね！…なんとなく！」

「うん！」

唯は、その後色んな話を話した。

「じゃあ、唯ちゃんが俺らを助けてくれたのか！？その、かやちゃん！」

「うん！」

ほっとけなかった！私もこの島に拾われた身だったし！」

「そっか、…ありがとな！！」

そして、バジルもその場で寝始めた。

そして、夜二人は起きる。

「おい、颯くん!!」

中途半端な時間に寝たから夜に起きちゃったじゃねーか!!」

「いいだろ別に!! てか、てめえが寝たのが悪いんだろうが!!」

「何をー!?!」

「もう、二人ともやめてよ!!」

颯とバジルは、ぎこちない仲になっていった。

(ああ、そういうタイプか!!)

唯はその時、あきれた顔でそう思った。
その時。

「ドウン」

銃弾が三人に向かって放たれた。

「ガササ」

藪の中から現れたのは四人の生きた海賊。

「よう、バジルてめえ何裏切ってたんだ！」

「うるせー、俺は決めたんだ！」

少しでも島人には、危害を加えないって！！」

「だから、島人と共に行動を！」

「なるほど、だけどそれで俺らの命が危うくなったら？」

「そうだ！バジル考え直せ！！」

「その島人に、既にスパイどもの手が回ってたかどうかするんだ！」

色んなやじが、バジルにかかる。

（バジル俺らは、信じてるぞ！）

颯がバジルの方を見る。そして、バジルは笑って言った。

「良いじゃねえか、それでも！」

俺らは命の恩人に取り返しのない事をしたんだ！　なら、それを改め何かの形で償わなければならねえ……！

世間が、俺らをクズと言おうが俺らも人の子！！！！！！

お前ら……本物のクズにはなるんじゃないやねえよ！！」

「……………！！」

「バジル！！……たまには良いこと言うな！！」

「たまにじゃねえよ！」

また一人、また一人、仲間が増えていく。

奇跡が起ころうとしていた。

「でも、すげえよな！」

島人は海賊らに島を取られるって思ってるのに、実際お前らは島な
んかに興味も無いんだろ！

こんな勘違い、あつという間に解決しそうなのに……！！」

颯が言う。

「解決出来たらとっくにしてるよ！」

「でも、解決しようにも正直もう島人がいるかどうか！」

バジルが言った。すると、颯は。

「たぶん、まだこの島に島人はいるぞ！」

と言う。

「えっ？」

「どういつことー!？」

「いや俺が初めてこの島で出会った島人 数十人、

それが今日の、あの炎での戦いの中には同じ奴が誰一人いなかった！
……だから、たぶんいると思う！」

キョトンとした目で、颯を見るその他。

「いや、でもその時颯フラフラだったじゃん！」

唯が言う。

「ああ、だけど俺、結構 記憶力いい方だから！」

「記憶無くしてる人に言われてもね！」

唯が、言い出した。

辺りはしらける。

と、唯があることに気づく。

「あつ、ということはバジルたちって
島には別に興味無いんだよね！」

「ん？ ああ！」

「私見たの！！
島の端で、島を頂くって言っている死んだ人！ じゃあ、その人が
スパイだったってことだよね！」

颯も言い出す。

「そついや俺も見ただぜ、そんな事をいつてる奴は!!
島の端がどうかはしらねえけど!!」

すると海賊たちが言う。

「じゃあ、とりあえずその場所まで行くか!!」

「だな!!」

颯と唯は察した。海賊たちはそのスパイたちに腹が立って仕方がなかったことを。

（平静装っているけど、実際腹ン中は、にえくりがえってるんだろ
うな!!）

時間が経つにつれ、海賊たちは感情を出し始めた。

（どうすんだよ!!この空気耐えられねえ!!）

（たぶん、海賊の人たちスパイの人と出会ったら一気に襲いにかか
るんじゃないかな?）

颯と唯が、心配そうに歩いているなか。

「颯くんと唯ちゃんには迷惑かけるなよ!!」

と、バジルが言った。
まとめ役のバジルに、颯と唯は安心した。

更に歩くこと数十分。

「ゴス」

一人の海賊が倒れる。

「おい、どうした？」

バジルが言う。

この時、颯やバジル、海賊たちには見えていなかったか、唯にだけは見えていた。

「あなたが、やったの？」

唯が言う。

「ん、唯ちゃん誰と喋ってる？」

「そこに誰がいるのか？」

バジルと颯が言い出した、その時。

「ゴッ」

また一人の海賊が倒れる。

「な、なんだよこれ？」

「お前ら！！」

すると唯が。

「颯、バジル逃げて！」

と、言う。

「どういうことだ？唯！！」

「私の周りにいるの、幽霊が！！」

「えっ？」

「たぶん、この人たちがスパイだと思う！」

「なっ、スパイがいるのか？」

「でも唯、逃げるたって相手は何人もいる訳じゃ……！」

バジルと颯が言う。

「十数人いる、しかも何人かは正気を失ってる！……
ここは私に、任せて……みんな逃げて！」

この時、颯たちの目に衝撃的なものが見えた。
それは、唯の体が消えていつていることだった。

「唯、……お前まさか、やられたのか？」

颯がそう言うと、唯はニコツと笑い姿を消した。

辺りが、騒がしく突風が吹き荒れた。

第八幕 蘇る記憶

ただ、ただ呆然とするしかない颯たち。

「どうするよ！」

バジルが言う。

辺りには、死んだ幽霊たちの気配はなく、
静かな風が吹いていた。

「唯はもう、ここにはいないんだな！」

颯が言った。

「それは、どういうことだよ！」

唯ちゃんは、もうこの世にはいないってか！？」

「そうじゃねえ！！この島の、何処かにはいるはずだ！
だけど、ここにはいねえ！」

唯は怒ってた、唯は、怒るとその辺りには風が吹き荒れる、さっき
吹き荒れた突風はそのせいだ！」

「じゃあ、突風が吹いていった方向にいくと
唯ちゃんはいるか？」

「ああ、だけど行かねえ方がいい！」

「なんで！？」

バジルが、キレ気味に言った。

「唯は、俺たちに被害が加えないために、ここから離れたんだ！
それなのに、俺たちが行ったら意味ねえだろ！」

「でも……唯ちゃんは女の子だぞ！！
何人も相手に戦える訳がない！」

「バジル！」

「！？」

「信じるよ！」

「……………お、…おう！」

颯の悲しそうな顔に、バジルは頷く。

「う、うわあああ！」

一人の海賊が、叫び出す。

「どうした？」

「こ、この二人…息 してねえ！」

そう、見えない幽霊にやられた海賊二人は
、死んでいた。

「とうするんだ、バジル!？」

「船の所に行くよ！」

木箱に遺体を入れて、海に送ってやる!!」

半日の時をかけ、四人は船に着いた。

「よく、船の場所なんか覚えてるな！」

颯が言った。

「当たり前だ!ここに何年いると思ってんだ!!」

「今 思うと、俺らよく生きてこれたな、

今まで!!」

「な!!」

船は既にボロボロで、原型を無くしてた。

バジルが、船の中から木箱を取り、死んだ仲間をその中に入れ海に流した。

その時のバジルは、やけに慣れた手つきで木箱を海に流していた。

その後すぐに、船が風に流され、バジルを乗せたまま宙に飛び始めた。

「ゴバババババババ」

「な、何だよ一体!？」

海賊たちが慌て始めたなか、颯だけは、
やけに落ち着いていた。

（唯か？）

颯がそう期待した中、飛びたった船の先端にある男が立っていた。
見たことの無い相手、スパイだった。

しかし、颯にはわからない。

（だ、誰だ!？）

すると一人の海賊が言った。

「あ、アイツだ!アイツがスパイだ!」

「何!？」

「ああ、そうだ! 俺も見たことある!」

その、スパイの足は透けていた。

「こいつも、死んでいるのか!」

と、その時。

「ドゴシャン」

船からバジルが降ってきた。

「なっ？」

「ひ、ひろえー…バジルを助けるー!!」

海賊たちが、一斉にバジルの真下で手を構える。
だが、時に残酷なことが起きた。

船に乗っていたスパイが、船をバジルに向けて振り落とした。

そしてスパイは言った。

「悪は、滅びる！」

とても大きな声で言った、スパイの言葉は
颯の脳内に強くこびりついた。

「ズウウウン」

船は、バジルや海賊たちの上にのし掛かった。

「ば、バジル!!」

颯が呟く。

その直後、スパイが颯の前に降りてきた。

「お前、何やってんだよ！」

颯が言つと。

「海賊に力を貸すお前も、当然罪人だ！！」

スパイがそついう。

逆流する血。込み上げる怒り。

「ゴウ」

颯は、気付くとスパイに殴りかかっていた。
でも、颯の拳はスパイの顔面をすり抜ける。

（何でだよ！）

スパイが言った。

「お前では、一生俺を殴れない！」

「！？」

「フフ、理由を教えてあげようか！！」

「！！」

「俺は、数年幽霊でいたから、これは確かなことだ！
生きている者が、死んだ人間、幽霊に触れるのは、互いが互いを好
きになっている時だけだ！」

「なっ！」

衝撃の発言。

「だから、お前は一生、俺を殴れない！」

颯は、その場から逃げ出す。

（すまん！バジル、敵はとれそうにない！）

颯は、この時記憶を少し取り戻していた。

スパイの言葉で、少し取り戻した記憶は、とても悲しいものだった。

その記憶とは、颯が父親にあることをいわれていた景色。「俺は、お前を愛せない。」。

颯は、泣き出した。

（あつ、ああ、！）

じわじわ蘇る記憶。

……………！

「そうだ…俺は、捨てられたんだ親に！」

暗闇から引きずられてきた記憶は、後に颯を大変な道へと誘う！

第九幕 無くしていた記憶

俺は、風上 颯。

これは、数年前の話…。

俺が十六歳の頃、あることに疑問を抱く。

それは、俺は、もう数年間親と会話をしていなかったこと。

そして、俺はその事について父さんに聞いた。

「父さん…！」

だけど、父さんはこう言った。

「俺は、お前を愛せない！」

衝撃的な発言だったが、父さんの寂しそうな顔に、俺は何か裏があると思った。

そこで、俺はその真相を確かめたく色んな所を調べた。

そして十七歳の時、ついにある事実を知る事になる。

父さんの会社に忍び込んだときのこと、やけに警備が硬く、どこか怪しい雰囲気の研究所。

いざ、中に入ってみると一瞬で迷子になり外にでられなくなった。

「カツカツカツ」

誰かが歩いてきた。

俺は、焦ってその場から逃げ出そうとしたが、見つかった。

そこには、女性が立っていた。

背が高く、ハイヒールを履いて綺麗な人だった。

「あら、あなた…研究者じゃ無いよね！

…！」

「…！」

俺はその場から逃げ出す。

「フッフ…実験体が勝手に逃げ出して…！」

俺は意味が全く分からなかった。

そして、俺は外に出ようと必死に走り回る、だけど、気が付けば俺は大勢の科学者に追いかけられていた。

「実験体が逃げたぞ…！」

意味の分からない発言。

（父さんは、一体何の仕事を…？）

俺は、とっさに一つの部屋に隠れ込む。

「ガチャン」

そして、鍵を閉め、隠れられそうな箇所を探した。
辺りは薄暗く、いくつもの巨大なカプセルに人が入っていた。
この時、確信した。父さんは危険な仕事をしていると。

「……………！」

「……………！」

隣から大声で叫び声が聞こえる。
俺は、そこに耳を傾けた。

「……………！」

聞いたことのある声、父さんだった。

「いい加減にしろ、いつになったらお前の息子連れってくるんだ？」

どうやら父さんは、誰かと話していた。

「親の心境になったら、手離せなくなったとか言っなよ！」

「は…はい！」

父さんは何故か、もの苦しそうに喋っていた。

「あれは、事実上お前の息子では無いんだぞ！
ここで生まれた実験体だ！」

そう！俺は本当の父さんの息子では無く、数年前この研究所で生まれた実験体だった。

で、実験体の俺の監視役として、父さんが推薦されたと言つことを、その時知った。

十七歳の俺には、残酷な話だった。

「とりあえず、ここで話すことでは無いな！隣の部屋に行こう！」

父さんたちが、こっちの部屋に入ってきた。

俺は、一つのロッカーの中に隠れた。

「もう一度だけ言っておく、明日にでも連れて来いよ！」

俺は、父さんがハイと、言うと思った。

だけど。

「俺は、…俺だって一人の人間です！！！」

「…だから！？」

「颯は、実際本当の俺の子供じゃなくても、息子には変わりないです！」

「ハハハハハ、颯っていう名前を付けたのか！！」

俺は、お前があまり感情移入しない人間だと思って、あの子を預けたんだがな…！」

「……………！」

「何を黙っている、お前らしくない！」

「家族を売る人間は、まともじゃ無いでしょう！」

「何が言いたい？」

「息子は、ここには連れてきません！」

俺は、思った。父さんが父さんで良かったと。
父さんが、俺と会話しなかった訳も分かった。愛情を生まないため。

だけど、父さんは知らない間に俺を愛してしまっていたんだ。

「ふふ…ハハハハハ、貴様ア…
連れて来ないじゃなくて、私は連れて来いと
言っているんだ！」

男がキレだした。

「あれは、実験体だ、お前の息子では

無い！

ここに連れてこないと言うのなら、私があればに費やした時間を返せ
！！

ふふ…無理だろう、なっ！！！！

あつ、そうか…分かったぞ！隠しても無駄だ！」

「な、何を！？」

「お前は、この数年で気付いたはずだ！

あれが完成していると！

そうさ、私が発明したんだから、あの実験体、颯くんは完成しているんだ！」

「何を言っているんです？」

「ははは、横撮りか！！

人の作品に、…少しばかり携わったからって！」

男の気は、既に狂っていた。

「返せ、返せ、…返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ返せ…力
アーエーセエー！！！」

気がつく、俺はその男をぶつ飛ばしていた。

「なん…だよ、誰だ　お前は？」

「颯だ！！！！」

「なっ、そうかお前が颯か！

風上、お前連れてきてたのか！？」

は、颯君　私を覚えているか　君の生みの親だ！」

俺はその時、初めて人を殺した。

「てめえが、親な訳ねえだろ！」

「颯、何でここに？」

「父さん、今まで守ってくれてありがとう…
今度は俺が父さんを守る番だ！」

その日、その研究所はたった半時で無くなった。

「颯、すまない…!!」

「…?」

「お前は、俺等が作り出した 人造人間なんだ!!」

「うん…!」

「……悪いが、これが世間にバレたらマズいことになる、…!」

「うん！」

「だから、……お前には迷惑ばかりかけるかもしれないが、これからは、二人ひっそりどこか遠くで暮らそう!」

「うん!じゃあ……これからは……!」

「……!?」

「楽しい暮らしが、できるんだね!!」

「……………ああ!!」

俺は、その時初めて父さんの前で笑った。
だけど、悲劇が起きたのはここからだった。

「ドスッ」

父さんの肩に何かが刺さった。
注射器だった。

「うつ、！」

父さんはみるみるその場に倒れていく。
そして、あることを言いその場で力果てた。

「教授…!!」

目の前には、かなり年のとった男が立っていた。

「はあああ、貴様等 一体何をしたか、
分かっているのか!？」

「…!!」

「これはもう、ただの犯罪では無いぞ!
こんなに派手にやってくれたら、警察を呼ばなくても、そのうち来るだろう…!!」

「父さんに、何をした？」

「はっ？毒を討ってやっただけさ！

もう死んでるよ！

そんな事より貴様等の目的は何だ！？」

「そんな事だと！？……目的！？」

「ああん？」

「暖かい生活を手に入れるためだよ……！」

気がつけば、俺はその男を殴り倒していた。

これから、やっと父さんと楽しく暮らせると思った矢先のこと。
全てがなくなり、どうしたらいいか分からなくなった俺は、一人
海まで歩いていった。

死のうとしたんだろう……

海の中に入り、だんだん……だんだん沈んでいく、泣きながら足は前
へ一歩一歩……。

でも。死ねば父さんに会えると思ったから、あまり怖くなかった。

そして、俺は海へ沈んでいった。

第十幕 新たな道標

すべての記憶を思い出した颯。

「俺は… 死ねなかったのか！」

颯は、ただ森の中でさまよっていた。

（なんで、今このタイミングで思い出したんだ！）

「ああ… 父さん、俺どうしたら…！」

「まだ、成仏できねえよ…！」

そのころ、バジルは死んでなお成仏できずに、この世に残っていた。

「ああ、俺らもついて行くぜ！」

残りの海賊たちも同じように残っていた。
そこに、ひとりの島人が現れる。

「ザザー」

少し荒い風邪が吹く。

「お前も死んでいるのか？」

バジルが、透けている島人の足を見て言った。

「お前ら、何故死んでなおこの世に留まる！」

島人が、言う。

「うるせえな！俺にだって色々あんだよ！！」

「ダッ」

島人が襲いかかって来た。

だが、一流の海賊の前にひねり潰される。

「ぐあああああ！」

島人は倒れ込む。

「ほう、生きてる時はあれだったか、死んでるとおまえ等に触れることが出来るのか！！」

バジルは、島人の顔をつかみ言った。

「人を恨んでるうちは、いつまでたっても幸せにはなれねえぞ！！」

「くっ！」

バジルは思った。

（これなら、唯ちゃんの力になれるかもしれないねえ！！）

「ハア…ハア…!!」

颯は歩いていった。

「おい!!」

一人の島人が颯に会いに来た。

「また、お前か!!」

「また、って言われるほど会ってねえよ!!」

と、そんな事を言ったのは、この島の浜辺で颯の顔面に拳を入れた男だった。

「お前、正気があるんだな!!」

颯が言った。

「ザザザ」

すると突然、島人が颯に向かって土下座をした。

「すまねえが、おりいって頼みがある！

この数日、お前をつけさせて貰った…

だから、お前の事もガキの思いもわかった！」

「何が言いたい？
ガキって唯の事が！？」

「ああ！……」

俺らは、お前を海賊の仲間、そうじゃ無くてもこの島を乗っ取る人間として見てきた！

だけど俺はこの数日お前を見てきて思った

お前なら頼めると、信用出来ると！」

颯が言う。

「お前が、何を俺に頼もうとしているかは知らないが、都合良すぎだろ！！」

俺は、お前らのお陰で大変な目にあつた！
俺だけじゃねえ唯やかやだつて……！！」

「ああ、だからあのガキの思いもわかつたつて……本当すまねえと思つているんだ！」

颯は、島人の真剣な表情にあきれた顔で言う。

「頼みつてーのは何だ？」

「き、聞いてくれるのか！？」

「ああ！」

（……………何でこんな時に！！）

「頼みって言うのは、島人の始末だ！」

颯は、理解出来ていない。

「ど、どういうことだ？」

「俺は、この数日お前らをつけて、誰が間違っていて、誰が敵なのかはつきりした！」

この島にいる島人の大半はもうその事を知っている…俺が説明したから！」

「……………！」

「でも、その事を説明してもお前らを襲うのを止めない連中がいる

……………

それが、正気を失った島人だ！」

……………。

「なるほどな！」

だからって、俺がその島人たちをこの世から葬って、他の島人は納得するのか！？

……………いくら俺が、悪者じゃないって分かったからって、そんな事したら他の島人は俺を恨むだろう！」

「ああ、だからその係りは…
唯にやって貰う！」

「えっ!!」

「唯には、一度説明したが聞き入れてくれなかった！だから、お前から唯に頼んで欲しい！」

「俺が頼んだからって、唯が動いてくれるかどうか!？」

「お前…唯にさわれるんだろ？」

「ん？」

「知ってつか!？」

人間が幽霊にさわれるのは、お互い好きになってるからなんだよ！」

(……………ああ!そんな事言ってたな!!)

「なっ、頼む！」

颯は、少し間を空け頷き言った。

「分かった。正気を無くした幽霊たちの鎮める解決策が無いんならやるしかねえよな!!」

「恩にきるぜ……………！」

俺、高野 たかの じゅん 準って言うんだ！」

「俺は颯!!」

二人は、歩き始めた。

歩くこと一時間、準はある光景を見る。
それは、唯だった！

「ゆ、唯！！」

「えっ！？唯がいるのか！？」

「ああ！！」

颯も徐々に唯の姿が見えてくる。

そして、そこには海賊姿の、おそらく
スパイと思われる者達と戦う唯がいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7756x/>

風上颯の霊体験記

2011年11月23日17時52分発行